

第 1 章

第60回 日米学生会議概要

第60回日米学生会議事業概要…………… 8

参加者一覧 日本側……………10

アメリカ側……………11

メディアへの掲載……………12

“Students Redefining Their Role through Insight and Action”

新たな潮流へ～ 60回を通しての再考と創出～

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念の下、1934年、満州事変を契機に悪化していた日米関係を憂慮していた4人の日本人学生が太平洋を渡り、日米学生会議を創設した。以後、太平洋戦争勃発に伴う会議中断をはじめ数々の困難を乗り越えながら、学生同士の率直な対話が相互理解を深め、平和の実現に貢献するという創設者の信念が継承され今日に至る。日米学生会議は創設時より学生独自による会議の企画、運営が行われ、毎年夏に日米交互で開かれる約1ヵ月の会議は、日米の学生による相互理解と友情を醸成する場であり続けた。

現在の日米関係は、歴史上最も成熟した2国間関係とも言われるようになり、創立当初の目的は達成されつつある。しかし我々を取り巻く世界に目を向けると、テロリズム、環境問題、貧困、民族問題など様々な問題が山積している。このような状況の中で日米両国は、良好な2国間関係のみに満足せず、「世界の中の日米」という視点に立った行動が求められている。一方で、数々の困難を乗り越えながら日米関係に寄与し続けてきた日米学生会議は、良好と思われがちな日米関係、国際交流の一般化、社会貢献を掲げる学生団体の増加など様々な要因によって差別化と新たな価値の創出が求められている。第60回日米学生会議は、“Students Redefining Their

Role through Insight and Action”「新たな潮流へ～ 60回を通しての再考と創出～」をテーマとして掲げ、ポートランド、ロサンゼルス、モンタナ、ボストンで開催される。この記念すべき第60回会議を機に、日米関係、また日米学生会議自体を問い直し、さらなる発展への追求を目指す。

日米両国の学生は、文化や言語の壁を乗り越えながら、特定の利益に拘束されない率直な議論を交わすこととなる。その過程において、参加者は自身の考え方や価値観の根幹、そして社会の中における自身の役割を見つめ直す機会に遭遇するだろう。第60回日米学生会議では、分科会活動、フォーラム、フィールドトリップなどで個々人が主体的に行動する場を設けることにより、自身の考えや思いを積極的に発信していくこととなる。また、政府、地方自治体、NGO、NPO、有識者の方々及び会議参加者以外の学生との対話を積極的に取り入れ、共に再考する機会も創出していく。このように日米学生会議を通じて得られた経験や成長はそれぞれの参加者に蓄積され、築き上げた信頼と絆は様々な問題を解決する一助となり、必ずや世界に平和をもたらすための礎となるだろう。第60回日米学生会議は、学生独特の意見や考えを発信し、行動する場を設け、未来への強固な基盤を創出することにより、新たな潮流を生み出す会議となることを目指す。

事業概要

【主催】

財団法人 国際教育振興会

【企画・運営】

第60回日米学生会議実行委員会

【後援】

外務省、文部科学省、米国大使館、日米文化センター、
財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会、
社団法人 日米協会

【本会議期間】

2008年7月28日(月)～2008年8月22日(金)

【開催地】

ポートランド、ロサンゼルス、モンタナ、ボストン

【参加者】

日本側36名(実行委員8名を含む)

アメリカ側26名(実行委員8名を含む)

本会議概要

第59回日米学生会議の参加者から選出され、発足した実行委員会が、日本側の主催団体である財団法人国際教育振興会、米国側はISC, Incの協力の下、本会議開催のための準備活動を行なう。参加者が決

定した後、所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、講演会や勉強会、合宿などを事前に行ない、夏の本会議に臨む。

本会議では、日米各36名、合計72名の学生が約1ヵ月にわたって共同生活を送る。本会議の主な活動として、討論が中心となる分科会、各種のフィールドトリップ、終盤に開催されるフォーラムなどが挙げられる。参加者が7つの分科会に分かれ、第60回会議のテーマである「新たな潮流へ～60回を通しての再考と創出～」の下、ディスカッションを行なう。また、フィールドトリップでは、各自の視野を広げ、現実に即した議論をするための基礎とし、討論の充実化を図る。さらに、本会議では議論にとどまらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に地域の方々との交流を図っていく。フォーラムでは、分科会での討論の結果など本会議の成果を社会に向けて発信する。

本会議終了後には、参加者は会議の内容を報告書にまとめ、第60回日米学生会議の総括とする。各参加者は、本会議で得られた経験を胸に社会へと巣立っていく。

【分科会】

本会議において活動の中心となる分科会は7つ設けられており、日米双方からなる参加者が、本会議期間を通じて議論を重ねる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪れるなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。なお、第60回会議における分科会は以下の通りである。

- ・環境とコミュニケーション～自然と共生するために～
Communicating Environmental Ethics: Media Mindset and Ecological Inspiration
- ・法と社会
Comparative Law and Society
- ・企業の社会的責任(CSR)と市民～社会発展への新たな視点～
Corporate Social Responsibility in Development
- ・科学と倫理～真に豊かな社会形成を目指して～
Ethics: Holding Science Accountable to Humanity
- ・現代社会と伝統～調和と共生の模索～
Exploring the Relationship between Tradition

and Modernity

- ・悲劇の記憶～歴史認識と教育の役割～

Memory of Tragedy: Examining Vehicles of Bias, Education and Peace

- ・マイノリティーと多文化社会

Minority Issues: From Social Discrimination to Social Contribution

【フィールドトリップ】

分科会の議題や各開催地に関する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGOおよび研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることができる貴重な機会であり、現実に即した議論をするための基礎とする。

【Special Topics】

テーマが既に決められている分科会とは異なり、参加者が個々の興味や便宜に沿った議論を自由に設定し、異なる視点から議論を行なう。参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見力、論題設定能力などを養う。同時に、より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想の獲得により、会議をより充実させる。

【Conference Wide Discussion】

分科会では扱わないテーマを対象とし、日米学生会議OB、OGや専門家をゲストスピーカーとして招き、第60回会議のテーマである「再考と創出」を掲げ、既存の事柄への問いかけをするとともに、新たな潮流へと向かう可能性について参加者と共に考えることを目的とする。

【Conference Wide Reflection】

参加者が一同に集い、会議中に感じた悩み、不安、感動、喜びなど、様々なことを自由に話し合う。自分の思いを全体に伝え、また他者の思いを共有することで、自己を振り返り、他の参加者との相互理解を促進することを目的とする。

【ファイナルフォーラム】

会議の最終開催地、ボストンで行なわれる。本会議における分科会の発表など、第60回日米学生会議の成果を提示していく。現代社会が抱える問題を来場者と共有し、会議の成果を社会に発信することを目標とする。

第60回日米学生会議日本側参加者名簿

日本側実行委員	大学	学部・専攻	学年	RT
武田尚樹*	慶應義塾大学	経済学部	3年	
李 凌叡**	東京大学	法学部	4年	Law
伊関之雄	京都大学	経済学部	3年	CSR
呉 宣咏	早稲田大学	国際教養学部	3年	Minority
高野恭平	岐阜大学	医学部医学科	5年	Science
竹内菜緒	国際基督教大学	教養学部国際関係学科	3年	Environment
廣田隆介	慶應義塾大学	法学部政治学科	4年	T&M
渡辺恭子	広島市立大学	国際学部国際学科	4年	Memory

*は実行委員長、**は副実行委員長を示す。

日本側参加者

明石恵美子	慶應義塾大学	法学部政治学科	4年	Memory
李 鎮河	東京大学	工学部電子工学科	4年	Science
居鶴有未恵	一橋大学	国際・公共政策大学院公共法政プログラム	修士課程2年	T&M
伊藤昂介	慶應義塾大学	法学部政治学科	2年	CSR
今矢涼子	同志社大学	法学部法律学科	4年	Law
大井あゆみ	慶應義塾大学	法学部政治学科	4年	Science
小野 元	京都大学	総合人間学部	2年	Minority
金光慶紘	東京大学	工学部システム創成学科	4年	Environment
後藤昌也	千葉大学	医学部	6年	Law
坂本朋美	京都大学大学院	農学研究科森林科学専攻	博士課程1年	Environment
新宮清香	東京大学	法学部	3年	T&M
神馬光滋	国際基督教大学	教養学部国際関係学科	2年	Minority
高畑乃枝	国際基督教大学	教養学部社会科学科	3年	Memory
竹内友里	東京大学	教養学部文科一類	2年	CSR
田中 豪	東京大学	教養学部文科一類	2年	Minority
中村玲奈	慶應義塾大学	法学部政治学科	3年	Environment
仁平理斗	早稲田大学	国際教養学部	4年	Environment
比嘉慎一郎	静岡大学	工学部システム工学科	3年	Memory
廣瀬祥子	立命館大学	国際関係学部国際関係学科	4年	CSR
誉田有里	慶應義塾大学	法学部政治学科	2年	Law
松尾恵輔	早稲田大学	法学部	3年	T&M
松本秀也	慶應義塾大学	商学部	3年	T&M
盛島正人	上智大学	比較文化学部比較文化学科	4年	CSR
安川瑛美	慶應義塾大学	文学部人文社会学科	4年	Minority
油井英孝	東京大学	経済学部経済学科	4年	Law
横山雄一	東京大学	教養学部文科一類	2年	Science
渡辺千尋	上智大学	文学部英文学科	4年	Memory
渡邊ともね	東京医科歯科大学	医学部保険衛生学科	2年	Science

Law=法と社会、Minority=マイノリティと多文化社会、Science=科学と倫理～真に豊かな社会形成を目指して～、
 Environment=環境とコミュニケーション～自然と共生するために～、T&M=現代社会と伝統～調和と共生の模索～、
 CSR=CSRと市民～新たな社会発展の視点～、Memory=悲劇の記憶～歴史認識と教育の役割～

第60回日米学生会議アメリカ側参加者名簿

アメリカ側実行委員	大学	学部・専攻	学年	RT
Sam Scully*	Bowdoin College	Asian Studies	Junior	
Hidemi Tanaka**	Macalester College	Political Science	Junior	CSR
Jessa Hutchins	Fashion Institute of Technology	Textile Marketing	Junior	Law
Bethany Marsh	University of Washington	Japan Studies	Graduate	Memory
Josh Schlachet	Cornell University	Asian History	Senior	Environment
Aya Nakanishi	University of Pennsylvania	Psychology	Junior	Minority
Joshua Turner	University of Hawaii at Manoa	Japanese	Senior	T&M
Nancy Yang	Harvard University	E. Asian Studies	Junior	Science

*は実行委員長、**は副実行委員長を示す。

アメリカ側参加者

Neal Akatsuka	University of Hawaii at Manoa	Anthropology	Junior	Science
Robert Cooper	Kalamazoo College	East Asian Studies	Sophomore	Environment
Jon-Michael Durkin	University of Akron	Political Science	Junior	Environment
Kayoko Hirata	Cornell University	Urban Studies	Freshman	Environment
Elizabeth Jones	Bowdoin College	Self Defined	Sophomore	Environment
Ji Eun "Karen" Jung	Dickinson College	Int'l Business	Freshman	Minority
Chien Lam	Mount Holyoke College	Int'l Relations	Sophomore	T&M
Hannah Lemmer	Smith College	East Asian Culture	Sophomore	Memory
Fausia Pagwumi Mahama	Dickinson College	Int'l Business	Sophomore	Minority
Colin Moreshead	Wesleyan University	East Asian Studies	Freshman	Science
Rebecca Norton	Willamette University	Linguistics	Senior	Law
Edward Phillips	University of Washington	Japanese Ling.	Junior	CSR
Gregory Schuster	University of Redlands	Global Business	Sophomore	T&M
Yuichi Shimokawa	Winona University	Global Studies	Sophomore	Memory
Catherine Simes	Wellesley College	Int'l Relations	Freshman	Law
Rachel Staum	Harvard University	East Asian Studies	Junior	Memory
Peter Weldon	University of California, LA	Education	Graduate	CSR
Charity Yoro	University of Hawaii at Manoa	Int'l Business	Senior	Minority

メディアの中の第60回日米学生会議

第60回日米学生会議実行委員会は、より多くの方に日米学生会議の存在を知っていただくために、様々なメディアを通じた広報活動を行ってきた。本会議中にも取材を受け、記事として取り上げていただいた活動やイベントもあった。以下に掲載するのはその主なものである。

・『朝日新聞』2008年2月22日「第60回日米学生会

議参加者募集」

- ・『日本経済新聞』2008年2月25日「人脈追跡～学生会議日米の懸け橋～」
- ・『中日新聞』2008年6月10日「きらり～医師像求めて米国学生と討論」
- ・『Missoulia』2008年8月8日「Missoula to host Japan America Student Conference」

日米学生会議
参加者を募集
今夏米国で開催
日米の学生が友好を深めあう「日米学生会議」がこの夏、米国で開催される。同会議実行委員会は、会議に参加する学生を募集している。

同会議は1934年に発足した国際的な学生交流団体。第60回の今回は「新たな潮流へ 60回を

通しての再考と創出」をテーマに、7月28日から8月22日に米国ポートランド市などで本会議を開く。本会議では、分科会で世界の諸問題を論じたり、専門家を招いてフォーラムを開いたりする。本会議の前に、日本の参加者は5月から7月に、合宿や勉強会がある。

本会議の参加費用は交通費込みで24万円。選考は1次が書類、2次が面接と試験、グループディスカッション。日米学生会議のホームページ(<http://www.jasc-japan.com/>)から申し込む。28日締め切り。

『朝日新聞』2月22日

Missoula to host Japanese student conference

Missoula has been chosen as one of four cities (the others are Seattle, Boston, and Los Angeles) to host the 2008 Japanese-American Student Conference on Aug. 8-15.

Seventy students, half from American universities and half from Japan, will stay with host families for three days, where the emphasis is on sharing cultures, building friendships and learning about Missoula. Part of the program will be to explore thoughts and ideas on war and peace between cultures.

Many JASC students and hosts will participate in a Jeannette Rankin Peace Center-sponsored candlelight walk to commemorate Nagasaki day on Saturday, Aug. 9.

The walk begins at Jacob's Island Park and follows the river trail to the Orange Street Bridge crosses and returns via the Higgins Avenue Bridge to the Peace Center for refreshments. The public is invited to participate. Bring a candle in a jar to Jacob's Island or any other point along the way.

『Missoulian』 8月8日

『中日新聞』 6月10日

医師像求めて

た会話がすくく刺激になった。この流れに身を置いておきたくて今年の実行委員に立候補した」

当然、医師を目指している。「さまざまな人から刺激を受けて、目指すべき医師像を確立したい」と前向きに語る。



米学生と討論

第六十回日米学生会議が七月二十八日から約一カ月、ロサンゼルスなど米国内を回り開かれる。岐阜大医学部五年の高野恭平さん(三三)は、実行委員として準備に奔走している。

参加者は両国から三十六人ずつ。科学倫理や、法と社会などをテーマにした七つの分科会を中心に進んでいく。「昨年参加して米国の学生たちとの討論や、ちょっとした

人脈 追跡

学生会議 日米の懸け橋

第二次世界大戦前、悪化した日米関係を学生の手で修復しようとした「日米学生会議」が今年で第六十回を迎える。昨年亡くなった元首相、宮沢喜一をはじめ、会議参加がきっかけとなり、日米で国際分野で活躍するOBやOGは数多い。

「会議に出なかったら、仕事はせず、家に入っていたらどうしよう。三十八年前を思い起こすのは米人紹介会社、コン・フリー・インターナショナルの日本法務社長、橋口邦子・咲江、ソニーなどの社外取締役として知られる。

一九七〇年に清泉女子大学からタンフォード大学で開かれた会議に参加。教育問題の分科会に加わった。一番驚いたのは側面女子学生が自分の意見をはっきり言っていたこと。日本では考えられなかった。運動の出会いも待っていた。

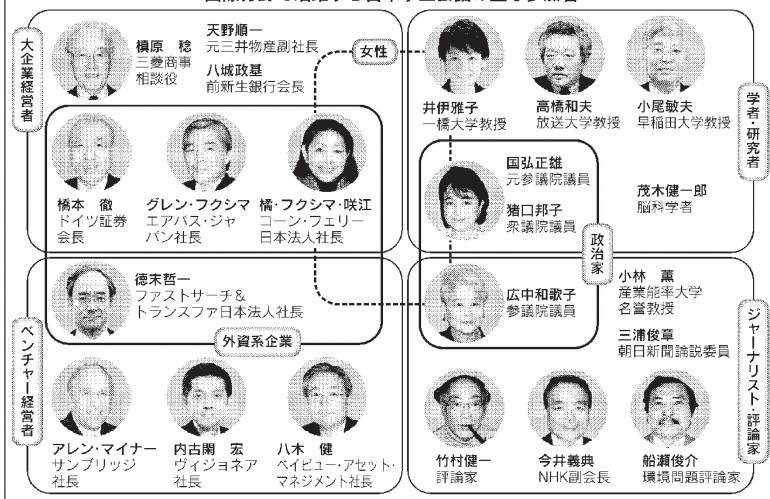
「米側は国際政治分科会の日本代表が女性であるのに驚いていた」と語るのは衆議院議員の猪口邦子。上智大学から参加し、エル・サレに留学。母校の国際政治の教授となり、軍縮会議の議長を務めるなど「学生会議が人生の進路を決めた」。

「世界銀行を建て、一橋大学の教授となった井伊雅子も会議のOG。医療経済分野でアジア諸国と交流、地産地消改革推進委員会などの委員を務める。民間から交流促進も外務省にはOBが多いが、民間で交流に携わる人も多い。三

かれ、多感な時期を一緒に過ごしたことから、カ・アルも多数誕生した。宮沢喜一とここで出会った。「日米青年会議」といわれたグループは照れるが、半面、女性に男性と交際し議論し、自信を付ける場もあった。

「米側は国際政治分科会の日本代表が女性であるのに驚いていた」と語るのは衆議院議員の猪口邦子。上智大学から参加し、エル・サレに留学。母校の国際政治の教授となり、軍縮会議の議長を務めるなど「学生会議が人生の進路を決めた」。

国際分野で活躍する日米学生会議の主な参加者



OB・OG、国際分野で活躍

当時はまだ日本への関心が低く、米側から動員されたのがスタンフォードの日系三世の学生、グレン・フクシマ (58) だった。彼は翌年、慶応大学に留学。次の日本会議の委員となつた咲江は彼に援手をお願い、その縁二人は結ばれた。

「一念に準備し、我々日本人はと語る姿は学生会議とよく似ていた」。後に通商代表部日本部長を務めたフクシマは日米交渉の様子をこう語る。日本政府の対応に戸惑う米政府代表に彼が日本の事情を解説したおかげで交渉が円滑に進んだ。

参議院議員の広中和歌子も人生が変わった一人だ。会議は戦争で中断したが、戦後に復活、とありあらず日本で開かれるようになった。そこに参加した彼女は米留學を思い立つ。

男女同じ立場で議論 「米国には女性が活躍する場があった」。そんな米国の姿を伝えようと翻訳に携わり、ハーバード大学教授、エラ・ウォーゲルが書いた「ジャパン・アズ・ナバーワ」を翻訳、ベストセラーとなった。ハーバード大学に移ったフクシマと結婚した咲江も翻訳を手伝った。学生会議は男女ほぼ半々で開

『日本経済新聞』2月25日